

材を斬る斧の音、板削る鉋の音、孔を鑿るやら釘打つやら丁々かちかち響忙しく、木片は飛んで疾風に木の葉の翻へるが如く、鋸屑舞つて晴天に雪の降る感応寺境内普請場の景況賑やかに、紺の腹掛頸筋に喰ひ込むやうなを懸けて小胯の切り上がつた股引いなせに、つつかけ草履の勇み姿、さも伶俐氣に働くもあり、汚れ手拭肩にして日当りの好き場所に蹲踞み、悠々然と鑿を研ぐ衣服の垢穢き爺もあり、道具搜しにまごつく小童、頻りに木を挽割日傭取り、人さまさまの骨折り氣遣ひ、汗かき息張る其中に、総棟梁ののつそり十兵衛、皆の仕事を監督りかたがた、墨壺墨さし矩尺もつて胸三寸にある切組を実物にする指図命令。斯様截れ彼様穿れ、此処を何様して何様やつて其処に是だけ勾配有たせよ、孕みが何寸凹みが何分と口でも知らせ墨縄でも云はせ、面倒なるは板片に矩尺の仕様を書いても示し、鵜の目鷹の目油断無く必死となりて自ら励み、今しも一人の若伎に彫物の画を描き与らんと余念も無しに居しところへ、野猪よりも尚疾く塵土を蹴立て、飛び来し清吉。

忿怒の面火玉の如くし逆釣つたる目を一段視開き、畜生、のつそり、くたばれ、と大喝すれば十兵衛驚き、振り向く途端に鬨向より岩も裂けよと打下すは、ぎらぎらするまで研ぎ澄ませし鉋を縦に其柄にすげたる大工に取つての刀なれば、何かは堪らむ避くる間足らず左の耳を殺ぎ落され肩先少し切り割かれしが、仕損じたりと又蹈込んで打つを逃げつゝ、抛げ付くる釘箱才槌墨壺矩尺、利器の無さに防ぐ術なく、身を翻へして退く機に足を突込む道具箱、ぐざと踏み貫く五寸釘、思はず転ぶを得たりやと笠にかゝつて清吉が振り冠つたる鉋の刃先に夕日の光の閃りと宿つて空に知られぬ電光の、疾しや遅しや其時此時、背面の方に乳虎一声、馬鹿め、と叫ぶ男あつて二間丸太に論も無く両臍脆く薙ぎ倒せば、倒れて益々怒る清吉、忽ち勃然と起きんとする襟元把つて、やい我だは、血迷ふな此馬鹿め、と何の苦も無く斬もぎ取り捨てながら上からぬつと出す顔は、八方睨みの大眼、一文字口怒り鼻、渦巻縮れの両鬢は不動を欺くばかりの相形。

やあ火の玉の親分が、訳がある、打捨つて置いて呉れ、と力を限り払ひ除けむと腕き焦燥るを、栄螺の如き拳固で鎮圧め、ゑゝ、じたばたすれば拳殺すぞ、馬鹿め。親分、情無い、此所を此所を放して呉れ。馬鹿め。ゑゝ分らねへ、親分、彼奴を活しては置かれねへのだ。馬鹿野郎め、べそをかくのか、従順く仕なければ尚打つぞ。親分酷い。馬鹿め、やかましいは、拳殺すぞ。あんまり分らねへ、親分。馬鹿め、それ打つぞ。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親分。馬鹿め。放して。馬鹿め。親。馬鹿め。放。馬鹿め。お。馬鹿め馬鹿め馬鹿め馬鹿め、醜態を見る、従順くなつたらう、野郎我が家へ来い、やい何様した、野郎、やあ此奴は死んだな、詰らなく弱い奴だな、やあい、誰奴か来い、肝心の時は逃げ出して今頃十兵衛が周囲に蟻のやうに群つて何の役に立つ、馬鹿ども、此方には亡者が出来かゝつて居るのだ、鈍遅め、水でも汲んで来て打法けて遣れい、落ちた耳を拾つて居る奴があるものか、白痴め、汲んで来たか、関ふことは無い、一時に手桶の水不残面へ打付る、此様野郎は脆く生るものだ、それ占めた、清吉ッ、確乎しろ、意地の無へ、どれどれ此奴は我が背負つて行つて遣らう、十兵衛が肩の疵は浅からうな、むゝ、よしよし、馬鹿ども左様なら。